1950 年代の山形県における児童文化運動についての予備的検討

―史料の残存状況を中心に―

久島裕介（東京大学大学院）

Preliminary Study of the Children's Culture Movement in Yamagata Prefecture in the 1950s

Focus on Archived Historical Documents

Yusuke Hisajima

Author's Note

Yusuke Hisajima is a PhD student, Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Abstract

The Children's Culture Movement in Yamagata Prefecture in the 1950s began with "Yamabiko Gakko." In July 1951, an educational study group called the Yamagata Prefecture Children's Culture Study Group was organized by Muchaku Seikyo, a practitioner of "Yamabiko Gakko," and his advisor, Suto Katsuzo. Led by this circle, numerous educational study circles were born in Yamagata Prefecture in the 1950s. This movement can be positioned as one of the most important cases that reveal the reality of educational study circles in the 1950s, which have not yet been sufficiently examined historically. As a preliminary study, the central task of this paper is to summarize the vast collection of historical documents related to this movement.

This paper divides the group of historical documents related to this movement into five categories. The first is the archives of the Yamagata Prefecture Children's Culture Study Group. The second is the archives of the Yamagata Children's Story Circle. The third is the archives of the branch circles. The fourth is the archives of the Yamagata Prefecture Children's Culture Study Council. The fifth is the archives of Tsuchida Shigenori. It was revealed that rich historical documents have been archived for each of them.

Keywords: circle, children's culture, Seikatsu-Tsuzurikata, Seikatsu-Kiroku, 1950s
キーワード：サークル，児童文化，生活綴方，生活記録，1950 年代

1950 年代の山形県における児童文化運動についての予備的検討

―史料の残存状況を中心に―

1　はじめに

本稿は，1950 年代の山形県における児童文化運動についての予備的検討として，この運動に関する史料の残存状況を整理した上で，研究の展望を示すことを目的とする。

1950 年代は，「サークル運動」の時代であった（成田，2005）。この時代には職場，学校，地域に無数のサークルが生まれ，人々はそこに集い，語り，議論をし，あるときには闘争の拠点とした（同上）。このような 1950 年代のサークル運動について，社会運動史や文学史などの領域では，2000 年代以降に研究が蓄積されてきている（道場，2016；宇野田 et al., 2016）。他方で教育学の領域においては，1950 年代の教師にとってサークルでの経験が重要な位置を占めていたことは指摘されてきたが（野々垣，2012；船寄・近現代日本教員史研究会，2021），その実証的な検討は緒についたばかりである[(1)]。なお，本稿では鶴見俊輔（1976，p.4）の議論に依拠してサークルを「顔見知りの仲間が自発的にする文化活動」と定義し，特に教育や子どもの問題を主題に据えていたサークルを「教育研究サークル」と呼称する。

以上を踏まえて本稿では，1950 年代の山形県における児童文化運動（以下「本事例」）に着目する。本事例は『山びこ学校』(1951) を端緒としている。その実践者である無着成恭と助言者である須藤克三が呼びかけ人となり，1951 年 7 月に山形県児童文化研究会（以下「県児文研」）という教育研究サークルが発足した。そして 1950 年代の山形県では，県児文研を筆頭に多数の教育研究サークルが生まれ，活動していたのである。

本事例で注目されるのは，その史料の残存状況である。サークル史研究では，史料的制約が最も大きな障壁のひとつとなる。研究の主たる史料になるサークル誌の多くが，ガリ版刷りで劣化しやすく，また仲間内で共有されたため公的な機関にはほとんど所蔵されていないためである。こうした一般的な状況に比して本事例は，サークル誌を含む史料が多数残存しており，1950 年代における教育研究サークルの位置を明らかにする重要な事例のひとつとして位置づけられる。そして本稿はその予備的な検討として，本事例に関する膨大な史料群を整理することを中心的な課題とする。

以下，本論では第一に，運動の中核を担った県児文研について検討する。第二に，県児文研の「姉妹サークル」として運動において独特の位置を占めた山形童話の会について検討する。第三に，県児文研の影響を受けて発足した支部サークルを検討する。第四に，1955 年以降毎年 8 月に開催された全県集会である山形県児童文化研究協議会について検討する。第五に，県児文研において中心的な役割を果たしていた土田茂範について検討する。

2　山形県児童文化研究会について

2.1　山形県児童文化研究会の概略

県児文研は 1951 年 7 月に発足した。「山びこ学校」の実践者である無着成恭とその助言者である須藤克三が呼びかけとなり，生活綴方を中心とする児童文化に関心を持つ教師らが集った。活動の中心は毎月の例会と機関誌『気流』

の発行であった。例会は概ね毎月第一日曜日に山形市内で実施された。『気流』は，会員が事前に送付した原稿を編集者がガリ版刷りで印刷・製本し，例会の際に配布された。

県児文研の活動は例会における研究にとどまらなかった。県児文研の会員は，自身の勤務校周辺の教師たちと新たなサークルを組織したり，新生のサークルに助言を与えたりした。また，県児文研は 1955 年以降毎年実施された山形県児童文化研究協議会を主導した。このように県児文研は 1950 年代の山形県における児童文化運動において中核的な役割を果たしていたのである。

なお，県児文研は 1960 年代以降も活動し続け，『気流』も 123 号まで発行されている。しかし会員の高齢化とともに徐々に活動は停滞し，2000 年に終息した（土田，2004）。

2.2　山形県児童文化研究会に関する史料

県児文研に関する史料の多くは山形県教育文化資料館に保存されている。特に重要な史料が機関誌『気流』である[(2)]。以下に示すように 1950 年代には計 41 号が発行された（表 1）。

表 1　『気流』一覧（1950 年代）

号	発行日	編集者	頁数
1	1951. 9. 1	未記載	4
2	1951. 10. 1	未記載	4
3	1951. 12. 1	鈴木久夫	4
4	所在不明		
5	1952. 2. 1	土田茂範	4
6	1952. 5. 10	鈴木幸夫・山田とき	4
7	1952. 6. 1	樋口実	4
8	1952. 7. 15	森幸市	4
9	1952. 9. 7	那須五郎	8
10	未記載		20
11	1952. 11. 9	森幸市・土田茂範	12
12	1952. 12. 31	土田茂範・斉藤比呂志・森幸市	14
13	1953. 2. 8	土田茂範・斉藤比呂志・森幸市	9
14	未記載		20
15	1953. 6. 7	森幸市・土田茂範	28
16	1953. 7. 20	未記載	18
17	1953. 10. 10	土田茂範	14
18	1954. 2. 6	土田茂範	9
19	1954. 3. 7	土田茂範	8
20	1954. 5. 14	土田茂範	16
21	1954. 7. 3	細谷憲利・和田憲太郎・土田茂範・森幸市	9
22	1954. 9. 26	土田茂範・森幸市・細谷憲利	23
特集	1954. 11. 30	鈴木久夫	33
23	1954. 12. 19	土田茂範	10
24	1955. 1. 2	土田茂範	10
25	1955. 5. 15	鈴木久夫	8
特集	1955. 6. 15	須藤克三	57
26	所在不明		
27	1955. 8. 8	鈴木久夫	9
28	未記載	鈴木久夫	24
29	所在不明		
30	1956. 1. 3	未記載	8
31	1956. 3. 5	鈴木久夫	24
32	1956. 5. 20	鈴木久夫	12
33	1956. 6. 23	鈴木久夫	9
34	未記載		11
35	未記載	鈴木久夫	10
36	未記載	鈴木久夫	10
37	1957. 7. 21	鈴木千里	8
38	1957. 9. 22	鈴木千里	10
39	1958. 6. 15	鈴木千里	6
40	1958. 11. 7	須藤克三・鈴木千里・皆川儀平・庄司敬蔵	15
41	1959. 10. 25	須藤克三・鈴木千里・皆川儀平・庄司敬蔵	16
42	1960. 9. 11	須藤克三・鈴木千里	15

1950 年代の『気流』の発行状況から指摘できるのは以下の 2 点である。第一はその編集体制について，会員が交代で編集を担当した時期

(no.1-9)，土田茂範を中心とする会員が担当した時期（no.10-24)，鈴木久夫が担当した時期(no. 25-36)，鈴木千里を中心とする会員が担当した時期（no.37-41）と区分することができる。第二に，そのうち鈴木千里が編集担当をしていた時期（1957-59 年）に発行頻度が減少していたことがわかる。

2.3　展望

大槻健（1982，p.290）が教育研究サークルを「民間教育運動の重要な一翼」を担ったと評価して以来, 1950 年代の教育研究サークルは「官」と「民」の対立構図における「民」の側に位置づけられてきた。県児文研についても，山形県教員組合や日本作文の会などの民間教育研究団体との密接な関係が強調されるなど（高木，2020；久島，2023)，「民」の側に位置づけられてきたと言える。

しかし『気流』を紐解くと，県児文研は 1953 年に教育研究所の所員である長谷川浩司との座談会を実施するなど，一般的には「官」の側に位置づけられる教育研究所との関係も有していた。このような事実を踏まえつつ，県児文研がいかなる団体といかなる関係を有していたか，その関係がいかに転換していったかを検討する必要があると言えるだろう。そしてこの検討は, 1950 年代の教育界における教育研究サークルの位置を明らかにするのみならず，これまで「官」と「民」の対立構図を前提に理解されてきた 1950 年代の教育界の構図を捉え直すことにもつながるだろう。

3　山形童話の会について

3.1　山形童話の会の概略

山形県では 1951 年から『山形新聞』に投稿童話欄（通称「山新童話」）が設けられていた。その山新童話への投稿者らによって 1954 年に発足したのが山形童話の会である。山形童話の会は県児文研の「姉妹サークル」として活動し，機関誌として『もんぺの子』を発行した。

山形童話の会は 1959 年 8 月の機関誌を最後に活動を休止していたが，1961 年 8 月に復刊し，活動を再開した。現在も存続しており，近年は年 1 号のペースで機関誌『もんぺの子』を発行している。

3.2　山形童話の会に関する史料

山形童話の会の史料の多くは山形県教育文化資料館に保存されている。特に重要な史料が機関誌『もんぺの子』である。以下に示すように 1950 年代には計 22 号が発行された（表 2)。

表 2 『もんぺの子』一覧（1950 年代）

号	発行日	編集者	頁数
1	所在不明		
2	1954. 6. 20	鈴木実	56
3	1654. 8. 20	安達良介	61
4	1954. 10. 5	鈴木実・安達良介	56
5	1955. 1. 10	鈴木実・安達良介	62
6	1955. 3. 30	鈴木実・安達良介	54
7	1955. 8. 1	鈴木実・安達良介	56
8	1955. 12. 5	鈴木実・安達良介	32
9	1956. 1. 30	鈴木実・安達良介	40
10	1956. 2. 28	鈴木実・安達良介	52
11	1956. 3. 30	鈴木実・安達良介	56
12	1956. 6. 25	鈴木実・安達良介	46
13	1956. 7. 10	鈴木実・安達良介	36
14	1957. 3. 21	鈴木実・安達良介	52
15	1957. 6. 30	鈴木実・安達良介	26
16	1957. 7. 31	鈴木実・安達良介	30

17	1958.1.10	鈴木実・安達良介	44
18	1958.7.20	鈴木実・安達良介	34
19	1958.8.15	鈴木実・安達良介	32
20	1958.12.1	鈴木実・安達良介	34
21	1959.7.1	鈴木実・安達良介	20
22	1959.8.1	鈴木実・安達良介	44
23	1961.8.10	鈴木実・安達良介	31

1950年代の『もんぺの子』の発行状況からは，『気流』と比較して1号あたりのページ数が多いことや，鈴木実と安達良介による一貫した編集体制を有していたことが指摘できる。

3.3　展望

1950年代の山形童話の会については，鈴木(2010)などの当事者による記述を除いて，歴史的な検討はなされてこなかった。しかし，このサークルは1950年代の教育研究サークルの特徴を示す非常に重要な事例として位置づけられる。山形童話の会について注目すべきは，その会員の属性である。『もんぺの子』の副題に「童話をみんなの手にかえそう」と記されていたように，山形童話の会は児童文化の担い手を大衆に開こうとしていた。そして実際に，「『もんぺの子』では，学生でも，農民でも，日雇労働者でも，主婦でも，誰れでも，あらゆる階級の人が童話をかいている」と記されているように，多様な属性の人々が童話の書き手として参加していたのである（山形童話の会，1954，p.55)。この事実は，1950年代の教育研究サークルが，同時期に隆盛した青年や婦人らによる生活記録運動と協働していたことを示唆している。このようなサークルにおいていかなる議論が交わされ，いかなる作品が生まれたのかについて検討することは，1950年代の教育研究サークルの固有の意義を析出することにつながるだろう。

4　支部サークルについて

4.1　支部サークルの概略

1956年に『山形教育』に掲載されたサークル名簿に24個のサークルが記載されており，1960年に『教育北方』に掲載されたサークル名簿に39個のサークルが記載されるなど，1950年代の山形県には教育研究サークルが普及していた。その中には「児童文化研究会」という名称のサークルが多数あり，サークルの普及において県児文研が影響力を有していたことが推察される。本稿ではこのように県児文研の影響を受けて発足したサークルを，当事者の用語法に即して「支部サークル」と呼称する(樋口,1954)。

4.2　支部サークルに関する史料

支部サークルの史料の多くは山形県教育文化資料館に保存されている。県児文研や山形童話の会と比べて，支部サークルは基盤が脆弱だったこともあり，史料が断片的にしか残存していない。それでも一定数の発行物が残存しているサークルは複数存在しており，本稿では5冊以上の発行物が残存しているサークルの発行物一覧を示す。なお，表内の発行日について，未記載であるが内容から時期が推定できる場合は(　)で括って示した。

第一はおきたま児童文化研究会である。県児文研の会員である樋口実を中心として1952年に発足した。1953年から機関誌『交流』を発行し，1959年発行のものまで計17冊が残存している（表3)。

表3　おきたま児童文化研究会発行物一覧

表題	号数	発行日	頁数
『交流』	1	1953.6.28	4

『交流』	2	1953. 7. 22	4
『交流』	未記載	1953. 9. 23	4
『交流』	5	1953. 11. 3	4
『交流』	6	1954. 4. 18	8
『交流』	7	1954. 5. 5	4
『交流』	8	1954. 6. 6	4
『交流』	10	1954. 8. 11	4
『交流』	11	1954. 9. 4	8
『交流』	13	1954. 11. 23	19
『交流』	14	1954. 12. 26	14
『交流』	15	1955. 1. 12	21
『交流』	18	1955. 9. 17	18
『交流』	19	1956. 1. 29	16
『交流』	未記載	1958. 4. 30	4
『交流』	未記載	1959. 1. 13	3
『交流』	24	1959. 2. 8	16

第二は庄内児童文化研究会である。山形大学内の児童文化クラブに所属していた庄司敬蔵などを中心として 1954 年に発足した。子どもの作品を中心とする『どんぐり』，教師の文章を中心とする『どんぐり会報』など，1954 年から 1963 年までの計 17 冊が残存している（表 4）。

表 4　庄内児童文化研究会発行物一覧

表題	号数	発行日	頁数
『どんぐり』	1	1954. 11. 12	19
『どんぐり』	2	未記載	14
『どんぐり会報』	1	(1955. 10)	4
『どんぐり会報』	2	(1955. 11)	4
『どんぐり会報』	3	1955. 12. 10	4
『どんぐり会報』	4	1956. 1. 13	4
『どんぐり会報』	6	1956. 4. 15	19
『どんぐり会報』	7	(1956. 5)	21
『どんぐり会報』	8	(1956. 7)	29
『どんぐり会報』	9	(1956. 9)	25
『どんぐり』	5	(1956. 9)	52
『どんぐり会報』	11	(1957. 2)	37
『どんぐり会報』	12	未記載	41
『どんぐり』	13	1957. 9. 29	54
『どんぐり局報』	2	1959. 5. 6	4
『どんぐり』	15	1959. 7. 5	17
『どんぐり特集』	未記載	1963. 8. 25	25

第三は東置賜児童文化研究会である。県児文研会員の山田ときと鈴木幸夫を中心として 1955 年に発足した。機関誌として『会報』と『ぶどうづる』を発行し，1955 年から 1960 年までの計 11 冊が残存している（表 5）。

表 5　東置賜児童文化研究会発行物一覧

表題	号数	発行日	頁数
『会報』	1	1955. 2. 8	4
『会報』	3	1955. 4. 23	4
『会報』	5	(1955. 6)	2
『会報』	未記載		3
『会報』	8	1958. 6. 20	8
『会報』	9	1958. 7. 4	2
『ぶどうづる』	11	1958. 9. 6	2
『ぶどうづる』	13	1959. 5. 9	10
『ぶどうづる』	15	(1959. 7)	2
『ぶどうづる』	16	1959. 8. 25	4
『ぶどうづる』	20	1960. 6. 28	8

第四はもっこくの会である。1955 年 8 月の第一回山形県児童文化研究協議会に参加した志田孝士を中心とする西田川地区の教師らが組織した。機関誌『もっこく』を発行し，1955 年から 1961 年まで計 13 冊が残存している（表 6）。

表 6　もっこくの会発行物一覧

表題	号数	発行日	頁数
『もっこく』	1	1955. 12. 5	34
『もっこく』	2	1956. 1	26

『もっこく』	3	1956. 3	34
『もっこく』	4	1956. 5. 1	25
『もっこく』	5	1956. 8	49
『もっこく』	6	1956. 9. 25	43
『もっこく』	7	1956. 12. 15	63
『もっこく』	9	1957. 4. 13	33
『もっこく』	10	1957. 5. 10	41
『もっこく』	15	(1960. 1)	20
『もっこく』	16	(1960. 3)	17
『もっこく』	18	1960. 8. 23	33
『もっこく』	19	1961. 3	37

第五は北国の会である。県児文研会員の新宮隆などの西村山郡の教師らが組織した。機関誌として『北国』と『北国会報』発行し，1955 年，56 年に発行された計 11 冊が残存している（表 7）。

表 7　北国の会発行物一覧

表題	号数	発行日	頁数
『北国』	1	1955. 2. 5	15
『北国』	2	1955. 2. 6	18
『北国』	3	1955. 4. 24	18
『北国』	4	1955. 5. 29	16
『北国』	5	1955. 6. 12	14
『北国』	6	1955. 7. 10	34
『北国』	7	1955. 8. 7	20
『北国会報』	3	1956. 5. 22	2
『北国会報』	4	1956. 6. 26	2
『北国会報』	5	1956. 9. 10	2
『北国』	8	1956. 9. 16	23

第六は最上児童文化研究会である。山形大学内の児童文化クラブに所属していた高橋保子らを中心として 1952 年に発足した。1953 年から機関誌『らっせる』を発行し，1955 年から 1959 年までの 8 冊が残存している（表 8）。

表 8　最上児童文化研究会発行物一覧

表題	号数	発行日	頁数
『らっせる』	6	1955. 7. 5	48
『らっせる』	7	1956. 1	30
『らっせる』	8	1956. 5. 20	22
『らっせる』	特別号	1958. 4. 2	10
『らっせる』	20	1959. 5. 17	10
『らっせる』	21	1959. 5. 21	4
『らっせる』	22	1959. 6. 21	16
『らっせる』	23	1959. 7. 12	8

第七は金曜会である。県児文研会員の土田茂範を中心に，西村山郡朝日町立送橋小学校内の職場サークルとして 1957 年に発足した。機関誌『金曜会通信』を発行し，1957 年から 1959 年までの 33 冊が残存している（表 9）。

表 9 『金曜会通信』一覧

表題	号数	発行日	頁数
『金曜会通信』	1	1957. 7. 10	3
『金曜会通信』	2	1957. 7. 16	3
『金曜会通信』	3	1957. 8. 30	4
『金曜会通信』	4	1957. 9. 3	15
『金曜会通信』	5	1957. 9. 5	13
『金曜会通信』	6	1957. 9. 12	4
『金曜会通信』	7	未記載	9
『金曜会通信』	8	1957. 9. 17	7
『金曜会通信』	9	1957. 9. 18	4
『金曜会通信』	10	1957. 10. 8	2
『金曜会通信』	11	未記載	3
『金曜会通信』	12	1957. 11. 1	4
『金曜会通信』	13	1957. 12. 17	4
『金曜会通信』	14	1957. 12. 19	2
『金曜会通信』	15	1957. 12. 21	2
『金曜会通信』	16	1958. 2. 11	2
『金曜会通信』	17	1958. 2. 14	2
『金曜会通信』	18	1958. 3. 4	6
『金曜会通信』	19	1958. 3. 9	2

『金曜会通信』	20	1958. 3. 11	2
『金曜会通信』	21	1958. 3. 13	4
『金曜会通信』	22	1958. 4. 24	2
『金曜会通信』	23	1958. 5. 6	2
『金曜会通信』	24	1958. 5. 30	2
『金曜会通信』	25	1958. 6. 13	5
『金曜会通信』	26	1958. 7. 16	4
『金曜会通信』	27	1958. 7. 18	10
『金曜会通信』	28	1958. 8. 22	5
『金曜会通信』	29	未記載	4
『金曜会通信』	30	1958. 10. 9	6
『金曜会通信』	31	1959. 1. 9	4
『金曜会通信』	32	1959. 1. 9	2
『金曜会通信』	33	1959. 1. 9	4

その他，支部サークルとしては，「河北教育座談会」と「ぬかぼの会」の機関誌がそれぞれ 1 冊ずつ残存している。また，「西置賜教育座談会」の『座談会会報』と『みんなで』は 83 冊が残存している。このサークルは 1949 年に発足しているため支部サークルとは言えないが，県児文研と共同で研究会を実施するなど交流があった。

以上の支部サークルに関しては，1960 年代以降の発行物がほとんど残存していない。『気流』や『もんぺの子』は 1960 年代以降のものも残存していることを踏まえれば，支部サークルの多くは 1960 年代前後に活動を停止していたことが推察される。

4.3　展望

1950 年代の支部サークルについて，多数の支部サークルが存在していたことは指摘されてきた。しかし支部サークルの活動内容や，県児文研との関係性については十分に検討されていない。

特に支部サークルと県児文研との関係性を明らかにすることは，1950 年代の教育研究サークルのネットワークの様態を明らかにする上で重要である。戦後の教育界では，戦前の教育会などにみられる上意下達の情報回路が批判され，水平的なネットワークの構築が期待されていた。こうした背景を踏まえて，教育研究サークルのネットワークにいかなる可能性があったのか，あるいはそのネットワークは権力性から自由であり得たのかなどを検討する必要がある。

5　山形県児童文化研究協議会について

5.1　山形県児童文化研究協議会の概略

山形県児童文化研究協議会（以下「県協議会」）は山形県の児童文化運動の全県集会である。1955 年に第一回の協議会が実施され，その後毎年 8 月に開催された（表 10）。なお，1960 年は県児文研の十周年記念集会に代えられたため，開催されていない。

表 10　山形県児童文化研究協議会の概要

	日程	会場	参加者
第一回	1955. 8. 10-11	教育会館（山形市）	約 200
第二回	1956. 8. 15-16	広福寺（山形市）	約 300
第三回	1957. 8. 14-15	山形市立第一小学校	約 500
第四回	1958. 8. 17-19	温海観光ホテル（西田川郡）	約 200
第五回	1959. 8. 6-7	教育会館（山形市）	約 300
第六回	1961. 8. 14-15	東根市立第二中学校	約 250

5.2　山形県児童文化研究協議会に関する史料

県協議会の史料の多くは山形県教育文化資料

館に保存されている。協議会当日に発行された協議会ニュースがほぼ全号残存しているほか，回によっては分科会の記録や参加者名簿も残存している（表 11）。

5.3　展望

県協議会については，『山形県教職員組合四十史』における概括的な記述を除いて（組合史編集委員会，1987），歴史的な検討はなされていない。

県協議会を検討することは，この運動がいかなる属性の人々を担い手とするものであったのかを明らかにすることにつながるだろう。注目されるのは，第二回県協議会の分科会として「生

表 11　山形県児童文化研究協議会関連史料一覧

	表題	発行日	頁数
第一回	協議会ニュース（no.1-3）	1955. 8. 10-11	17
第二回	第二回山形県児童文化研究協議会への御案内	1960. 7. 15	2
	協議会ニュース（no.1-9）	1956. 8. 15-16	31
	作文の部屋　例文	未記載	17
	作文のへや　記録	未記載	27
	村の生活記録	未記載	13
	人形劇の部屋　記録	未記載	14
	分科会記録　学校げきの部屋	未記載	15
	参加者名簿	1956. 8. 15-16	21
	教育の修行はたのしい：第二回山形県児童文化研究協議会の記録	未記載	17
第三回	第三回山形県児童文化研究協議会への御案内	未記載	2
	［書簡草稿］	1957. 7. 25	5
	協議会ニュース（no.1-4）	1957. 8. 14-15	20
第四回	第 4 回山形県児童文化研究協議会御案内	1958. 7. 10	2
	協議会ニュース（no.1-17）	1958. 8. 17-19	37
	歌集	1958. 8. 17-19	9
	作文教育を深めるために：作文の部屋で話しあう内容	未記載	2
	児童文学の部屋　報告シナリオ	未記載	1
	童話劇　ものまねさわぎ	未記載	2
	理科の会に集まろう	未記載	1
	参加者名簿	未記載	8
第五回	第 5 回山形県児童文化研究協議会御案内	1959. 7. 4	2
	協議会ニュース（no.1-11）	1959. 8. 6-7	43
	記録　夜の分科会　子どもの集団教師の集団	未記載	6
	参加者名簿	1959. 8. 6-7	6
第六回	第六回山形県児童文化研究協議会御要項	未記載	2
	速報（no.1-18）	1961. 8. 14-15	34
	受付簿	未記載	36
	参加者名簿	1961. 8. 14-15	10

活記録の部屋」が設置されていたことである。この事実は，この運動が教師のみならず生活記録運動に取り組む人々にも開かれていたことを示している。このような事実を手がかりとしつつ，参加者名簿や分科会の記録に基づいて，いかなる属性の人々が参加し，いかなる議論がなされたのかを明らかにする必要がある。

6　土田茂範について

6.1　土田茂範の略歴

土田茂範（1929-2003）は，山形県西村山郡三泉村に生まれ，1949 年に山形師範学校を卒業した。1950 年代の土田は，醍醐小学校（1949-1951 年度），西里小学校（1952-1956 年度），送橋小学校（1957，1958 年度），入間小学校（1959 年度）という西村山郡内の 4 つの小学校で教育実践に取り組んだ。

1950 年に国分一太郎と無着成恭の著作に触れたことをきっかけに，1951 年に生活綴方教育に取り組み始めた。同年に県児文研が発足し，無着成恭の呼びかけに応じて参加した。県児文研において土田は，毎回実践報告の資料を持ち寄るなど，最も熱心に研究に取り組んだ教師のひとりであった。

1950 年代の土田は，県児文研における研究を踏まえて多数の実践記録を発表した。単著だけで，『百姓のうた』(1955 年)，『村の一年生』(1955 年)，『国語の授業』(1957 年)，『百姓のうた　その指導記録』（1959 年），『村の教育』（1959 年）が刊行されている。このうち『村の一年生』は，日本作文の会がすぐれた実践記録に贈る小砂丘忠義賞を受賞した。

6.2　土田茂範に関する史料

土田茂範に関する史料が多く残存しているのは，土田茂範私家と山形県教育文化資料館である。いずれも土田茂範自身が保管していたもので，文集などの一部が山形県教育文化資料館に寄贈された。

本稿では，特に重要な史料として，土田茂範私家所蔵の土田の「教育ノート」の概要を示す（表 12）。「教育ノート」とは日々の教育事象を中心に，サークル等の研究会，他の教師との交流，読書について記述したものである。

表 12　土田茂範の「教育ノート」一覧（1950 年代）

表題	期間	頁数
アンテナの子供たちとの教室らくがき記録(1)	1951. 1. 9-1951. 3. 9	82
アンテナの子供たちとの教育手帖(3)	1951. 9. 25-1952. 2. 26	162
トラクターの子供たちとの教育手帖(1)	1952. 4. 4-1952. 10. 25	200
無題	1953. 4. 6-1954. 1. 9	180
教育手帖 Takasi の Nikki から(2)	1953. 1. 1-1953. 6. 8	77
教育手帖 Takasi の Nikki から(3)	1953. 6. 8-1953. 6. 15	6
［無題］	1954. 4. 4-1954. 10. 26	192
［無題］	1955. 4-1955. 12	40
［無題］	不明	40
授業の記録(1)	1957. 4. 8-1957. 5. 15	60
授業の記録(2)	1957. 5. 17-1957. 6. 29	60
授業の記録(3)	1957. 7. 1-1957. 8. 31	60
授業の記録(4)	1957. 9. 1-1958. 1. 7	60
授業の記録(5)	1958. 1. 8-1958. 3. 22	60
授業の記録(1)	1958. 4. 3-1958. 5. 19	60
授業の記録(2)	1958. 5. 20-1958. 8. 26	60
授業の記録(3)	1958. 8. 27-1958. 9. 26	60
授業の記録(4)	1958. 9. 29-1958. 11. 18	60

授業の記録(5)	1958.11.19-1959.3.16	60
［無題］	1959.9	60

6.3　展望

土田の「教育ノート」を活用した研究として，1950年代前半における土田の教育研究の展開を明らかにした久島（2023）が挙げられる。久島は，特に「教育ノート」における教育実践の事実の記述内容に着目して，土田の教育観がいかに展開していったのかを明らかにした。

今後の検討課題として残されているのは，1950年代後半の土田の教育研究の展開と，土田の教育運動との関わりである。土田は1950年代初頭から県児文研の会員として，自身の教育実践を基盤とする教育研究に取り組み続けた一方で，1950年代後半には教員組合の組合員として勤務評定反対運動や教育課程反対運動などにも関わっていった。このような土田は，「反省的実践家としての教師」と「労働者としての教師」（佐藤，1996，p.142）とのはざまで，葛藤を抱えていたことが推察される。このような土田の教師としてのあり方を検討することは，当時の教師像を明らかにすることにも寄与するだろう。

7　おわりに

本稿では，1950年代の山形県における児童文化運動に関する史料の残存状況を整理した上で，今後の研究の展望を示してきた。県児文研，山形童話の会，支部サークル，県協議会，土田茂範というそれぞれの対象について，豊富な史料が残存していること，そしてそれぞれが本事例の実態を明らかにする上で重要な検討対象であることが明らかになった。

この予備的検討を踏まえた上で，1950年代の山形県における児童文化運動の全容を明らかにすることが今後の課題である。その解明は，「過渡期」と特徴づけられている1950年代の教育界の時代像（「1950年代教育史」研究部会，2022）を，より明確にすることにつながるだろう。

謝辞

本研究の資料収集にご協力いただきました土田茂範氏のご家族，及び山形県国民教育研究所の皆様に，心より感謝申し上げます。

Notes

（1）　先駆的な研究として，埼玉県の事例に着目した山田恵吾（2020a；2020b）が挙げられる。

（2）　なお，山形県教育文化資料館には『気流』の他に，毎回の例会の前に会員に葉書で送付された「例会案内」もほぼ全て残存している。

References

「1950年代教育史」研究部会（2022）.『1950年代教育史の研究』野間教育研究所.

船寄俊雄・近現代日本教員史研究会編著（2021）.『近現代日本教員史研究』風間書房.

樋口実（1954）.「サークル報告」山形県児童文化研究会『気流』19号.

久島裕介（2023）.「1950年代前半における土田茂範の教育研究の展開」『教育学研究』90巻2号，pp.52-64.

組合史編集委員会（1987）.『山形県教職員組合四十年史』山形県教職員組合.

道場親信（2016）.『下丸子文化集団とその時代』みすず書房.

成田龍一（2005）.「『サークル運動』の時代」河西英通・浪川健治・M.ウィリアム・スティール編『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ』岩田書院，pp.245-260.

野々垣務（2012）.『ある教師の戦後史』本の泉社.

大槻健（1982）.『戦後民間教育運動史』あゆみ出版.

佐藤学（1996）.『教育方法学』岩波書店.

鈴木実（2010）.『やまがた児童文学の系譜（資料篇）』山形童話の会.

高木重治（2020）.「山形県における国民教育運動の展開」北河賢三・黒川みどり編著『戦中・戦後の経験と戦後思想』現代史料出版，pp.241-274.

鶴見俊輔（1976）.「なぜサークルを研究するか」思想の科学研究会編『共同研究　集団』平凡社，pp.3-21.

土田茂範（2004）.『海図のない航路』北の風出版.

宇野田尚哉・川口隆行・坂口博・鳥羽耕史・中谷いずみ・道場親信編（2016）.『「サークルの時代」を読む』影書房.

山田恵吾（2020a）.「1950 年代埼玉県における教育研究サークルの生成と展開(1)」『埼玉大学紀要 教育学部』69 巻 1 号，pp.167-192.

山田恵吾（2020b）.「1950 年代埼玉県における教育研究サークルの生成と展開(2)」『埼玉大学紀要 教育学部』69 巻 2 号，pp.289-309.

山形童話の会（1954）.『もんぺの子』2 号.